

バンヴェニスト言語学における主体の現れ——フロイト論文との関わりから

小野 文（慶應義塾大学）

エミール・バンヴェニストが言語（langue）と言説（discours）を対比させていく 50 年代、それと並行して「ことば」と「主体性」の関係についての考察も彼のうちで深められているのはよく知られた事実である。しかし実際に「ことばと主体性」の思考がどのように育まれているのかに関しては、「人称」に関する問題圏から、という曖昧な答えしか従来から見方は持ち合わせていない。本発表ではまず、「ことばにおける主体性について」

（1958）に至るバンヴェニストの諸論考の布置を捉え直し、そのなかで「フロイトの発見におけることばの機能についての注記」（1956、以後フロイト論文）が持つ重要性を指摘する。次に、フロイト論文はラカン派の精神分析との出会いから書かれていることを示し、とくに「ローマ講演」を初めとするラカンの書き物からの影響を、フロイト論文やその他のバンヴェニストの論考のなかに拾い出していく。最後に、「主体性」等その他のデイスクール論の重要概念が、精神分析との出会いという光のもとでは、どのような姿で現れてくるのかを検討してみたい。

疑似発話行為——クロノスの時間上の言語的時間

阿部 宏（東北大学）

バンヴェニストの「フランス語動詞における時称の関係」（1959）は、言語研究にとどまらず文学研究にも大きな影響を及ぼした。その主張は、以下のようなものであった。

発話行為は、根本的に異質な「話」と「歴史」の二種類に区別される。「話」は会話が典型的にそうであるように話し手と聞き手、および前者から後者への働きかけを前提としている。「歴史」においてはこれらの前提はなく、客観的記述をめざす歴史書がその典型であるように出来事は自らが自らを語るように展開される。フランス語ではたまたま、「話」を担当する複合過去と「歴史」を担当する単純過去という、過去時制の二種類の別がある。

この論文執筆の 6 年後に、彼は「言葉と人間の経験」（1965）という時間概念の起源を扱った興味深い論文を発表している。この中には自らの 1959 年の論文についても、複合過去／単純過去の対立に関する言及もないが、この論文は彼の時制理論のバックグラウンドを説明したものに実質的になっている。言語的時間は、常に発話の時点が基準で、ここ

からの振り返りが過去で、前望が未来である。つまり過去や未来は現在の中にあり、現在から独立してあるのではない。時間はまだ空間化されていない。この言語的時間から発話主体が捨象され、社会化され、直線で表象され、計量可能なカレンダー化されたものがクロノス的时间である。ここには特権的基準はなく、直線上に各出来事が配置されるのみである。一般的常識に反して、時間概念の基盤はあくまで言語的時間であり、クロノス的时间はそこからの派生態にすぎない。

ここから、「話」は言語的時間、「歴史」はクロノス的时间に対応するものであることが了解されよう。バンヴェニストは時制を含む時間表現全般を、言語内的に、つまり当時主流だった構造主義的な枠組みからではなく、言語とその基盤をなす認知という今日的な観点から捉えようとしていたのである。

残念ながら、この1965年の論文への言及は極めて少なく、1959年の論文との関係性への言及も管見ながら知らない。また前者の論文における時間概念は、必ずしもバンヴェニストのオリジナルではなく、イギリス観念論の哲学者マクタガートの『時間の非実在性』（1908）の強い影響下にあるのではなかろうか。

発表では、以上の諸点を指摘した後に、小説の地の文は実は純粋な「歴史」ではなく、「歴史」と「話」が重層的に重なり合ったものである、という仮説を提示したい。例えば以下の例において、「話」に特徴的な *sans doute* や *ici* の現れはどう考えればいいのか。その判断主体や基準点はどこに求めればいいのかであろうか。

Auprès d'une Parisienne en dentelles, dans le salon de quelque docteur illustre, personnage à décorations et à voiture, le pauvre clerc, *sans doute*, eût tremblé comme un enfant ; mais *ici*, à Rouen, sur le port, devant la femme de ce petit médecin, il se sentait à l'aise, sûr d'avance qu'il éblouirait. (Flaubert, *Madame Bovary*)

「歴史」たる作中世界への「話」の混入であるが、その「話」は、あくまで作中世界内で展開されており、発話主体たる書き手には帰せられないという意味で、バンヴェニスト的「話」ではない。そこで、疑似発話行為という概念を提唱したい。いわば、クロノス的时间上に疑似的な言語的時間が開いているのである。さらに、この観点によって時間・空間指呼詞、モダリティ表現のみならず、自由間接話法も含めて統一的な説明が可能ではないか、という展望を抱いている。

遂行文の発話主体と時間——アオリスト系発話への展開

川口 順二（慶應義塾大学名誉教授）

本発表の目的は、遂行文の発話主体とアスペクトを考察することである。

Benveniste はフランス語時制の考察において歴史叙述 *histoire* と対話 *discours* の対立を指摘し、歴史叙述はテキストが己を語るように展開するという比喻表現を用いた。この直感的な表現が言語学的に何を意味するのか、歴史叙述における発話主体という問題を考える必要がある。Culioli はこれをさらに発展させてアオリスト系発話 *aoristique* という概念を提唱したが、ギリシャ語などいくつかアオリスト形態を持つ言語の考察が背景にあったと想像する。この概念が有効とされるテキストタイプとして、供述（証言）、芝居のト書、経歴、スポーツなどでの実況中継、歴史叙述、モダリティ文そして遂行文などがリストに挙げられる。その後 de Vogüé がフランス語の断絶の半過去をアオリスト系発話と同定した。上に挙げたアオリスト系発話のテキストタイプのリストを見ると、Benveniste のいう己を語るテキストという視点からは大きく外れていることに気がつく。そこで発話主体の問題、それと同時にアスペクト問題を改めて考えることが必要である。ここでは主に遂行文を考えることにしたい。

遂行文は元来 19 世紀末にアスペクト問題として提起されたとのことだが、Austin は遂行文が事実確認文 *constative* と異なり 1 人称文に限定されることを前提とした。他方、Benveniste は逆に人称を中心問題とした上で遂行文に言及した。その後の語用論などに見られる流れでは、言語による行為の実現という面が注目されると同時に、事実確認文 *constative* との対比を超えてより一般的に言語行為そのものに興味に移る傾向が見られ、アスペクト問題は中心からやや外れてきたように見える。

発話理論では、参照系 *référentiel* として発話行為における発話主体と発話状況に基づく発話系、そしてそれとの断絶関係を持つアオリスト系が提示されてきているが、本発表では、遂行文を基本的にアオリスト系発話であるとする観点をとって、その発話主体とアスペクトの問題を考えてみたい。なおこれと並行して文字テキスト *texte écrit* の問題が発生するが、時間が許せばこれにも言及したい。